

厚かましい期待

編集委員会委員

高松 亨

TAKAMATSU, Toru

社団法人底質浄化協会常務理事

本誌の編集方針には、理論と実務の橋渡しをする、交通運輸それ自体のみならずこれに密接にかかわる社会の諸問題を幅広く扱う、とある。理論を研究と読み替えれば、投稿論文にはこうした期待が寄せられているわけだ。筆者は、平成23年末から編集委員の末席をけがしている。現職に就く以前に5年ほど都内の私大で工学系学部の教員を務めていたが、行政経験が長く、編集委員としては、実務者としての経験を生かすことが任務だろうと理解している。こうした立場にたって、実務で携わることの多かった「計画」の経験から、投稿論文に対する期待の幾つかを綴ってみたい。

紙幅の都合上、国土計画の作成経験に基づくものに限定するが、この計画策定にあたって最も参考になった研究は、長期時系列の国土構造の変遷を扱った研究であったように思う。東京への人口集中の構造を性別年齢階層別に分析した研究、明治期以降の交通機関の整備の長期的変遷と人口の地域分布のそれを扱ったものなどだが、膨大なデータ、一般には存在しないデータを利用・作成して行った分析は、計画実務者として極めて貴重な情報と感じた。筆者が、長期時系列での社会経済の変化の実態を知ることが計画の入り口だと思うからで、事実をあいまいにしたまま、観念が先行したかのような議論が多いと感じる昨今、このような地道な、現状と変化の理解に資する研究が多くなされることを望んでいる。

たくさん論文を参照してきたような記述から始めたが、計画実務に携わる過程で、さほど多くの研究成果を参考にしたわけではない。参考になったものはあまりなかったと言った方が正直なところだ。しかし、委員会等での研究者からの講演や意見交換は大変参考になった。論文ではなく話の方が参考になったのはなぜか。改めて考えてみると、話では論文には記述されない多くの周辺事項に論が及ぶからで、そこに科学の本質である対象の細分化・要素還元を超えた、総合化の考えが垣間見えたからではないかと思う。研究者は自分の研究テーマ以外はものを知らないと言った評価がなされることがあるが、御指導いただいた研究者の方々は、いずれも幅広い知識の持ち主ばかりであった。論文になると、研究テーマ以外の事柄に言及するのを避けるのかもしれないが、読み手からすれば、周辺事項との関連が詳しく述べられた論文の方が読みやすく、研究者の主張の理解もしやすいのではないかと思う。総合化を志向した論文が実務者にはありがたいと感じる。

次に、論文に期待するものとして「刺激」という言葉を使ってみた。先に述べた東京への人口移動の研究では、進学を契機に東京へ出てきて、そのまま東京居住となる若者が多い、女性の場合は東京で結婚する人が多いので男性より東京永住化が多いといった可能性が論じられていた。これなどは、まさに筆者が論文から受けた

刺激だった。五全総で「東アジア一日圏」という言葉を編み出し、日本とアジアの一体化を表現した時のことだが、ある女性委員から、「なんとひどいことを言い出すのか」とおしかりを受けたことも大いに刺激になった。当委員の主張は、これでは人間を機械と同じように扱っている、もっと人間の生き方を考える計画とすべきだ、というものであった。五全総のテーマに「文化」が入り、「開発」を冠した法律の改正がその後行われたのも、こうした刺激があったからだと思っている。

ところで、こうした刺激は何から来るのだろうか。論文には一般に新しい発見が求められる。新しい発見は研究者に強い刺激を与えるのであろう。しかし、研究者ではない筆者には、新しい発見の価値が分らないこともある。筆者は、示された事実だけでなく、思いもよらない切り口・思考過程などに強烈な刺激を受けることが多い。四全総の基本戦略の交流は、こうした刺激による新しいものの創造を狙いとして提示されたものだ。筆者は当時この意義を説明する際に、計画作成の事務局が国の機関や自治体等異なる出自の職員が混在して構成され、皆異なった経験や価値観をもっている、それがかえってタコつぼに入っていては見えないことを見せてくれる、といった解説をしていた。このイメージに基づけば、読者を驚かせる刺激満載の論文が提示され、驚かされた読者や研究者間で議論が巻き起こる。こんな場面が想起される。本誌が上述の編集方針を定めた目的は、関係者間での幅広い議論のきっかけづくりとされている。こうした激論の導火線となるような論文が期待されていると言える、言い過ぎだろうか。

最後に、文化というテーマにも触れてみたい。このことは、先述した、人間の生き方を考えることにつながってくる。工学・経済学等を中核とする交通運輸の世界では、馴染まないのかもしれないが、文化は、社会学や文化人類学だけが取り組むテーマではないのではないか。悩める先進国日本ではあるが、経済だけ議論している、成熟した国家と自称できないのではないかとさえ感じている。本誌でも、景観等の議論が行われるようになってきており喜ばしい限りだが、多くの研究者にもっと文化に目を向けてもらいたいと思う。

以上、自分ではできないことを承知の上で、厚かましい期待を述べてきた。個人的感想として、既存学会の論文査読では本質的でない意見を平気で出してくる人がいるなどの印象があるが、本誌の編集委員会では、編集方針にそって丁寧な審査が行われていることを、数度参加しただけで確信した。最後にこのことを付記し、多くの論文投稿を促すメッセージとしたい。